劇場版・仮面ライダーキバ/BLAZING.BLOOD『超・クライマックス刑事』

一条ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
劇場版・仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤ『超・クライマックス刑事』

【Ｎコード】
Ｎ２９１７Ｊ

【作者名】
一条ツカサ

【あらすじ】
辞令――デンライナー署刑事課を命ず。仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤの番外編、否、劇場版！！電王、キバ、灼眼のシャナ、三世界の融合を見逃すな！

灼眼のしゃなたん・キバッてクライマックス編

――とある異空間、その名も『封絶会議室』。
そこには、丸テーブルを囲んで何人かの人（？）が座っていた。

「んじゃあ、劇場版『仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤ・超クライマックス刑事』、緊急会議を始めるぜい」
司会進行役のキバットバット三世が、『司会』の名札をつけながら言う。

「え～、此度の企画は２００８年公開の『仮面ライダー電王＆キバ・クライマックス刑事』を、このファン小説『仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤ』でもやってみようという……」
「うるせぇ！」
「あ～～！」
隣に座っていたモモタロスが、キバットを蹴っ飛ばした。

「んなことはどうでもいい！　ついに始まるぜぇ、俺の映画・ノベルバージョン！」
「映画ノベルバージョンって単語自体矛盾してるけどな」
奏夜が腕組みをしながら、冷めたコメントを返す。
「大体、この緊急会議も意味わかんねぇよ。作者が『電王とシャナの映画の始まりを飾るなら、イマジンアニメとしゃなたんシリーズだろ！』なんて言い出したのが原因だし」
「先生、ある意味いつものことですけど、あまり問題発言は控えて

下さい。更に話が脱線しますから」
何かと暴走しがちなこの作品の良心、坂井悠二がストップをかける。
「問題発言ねぇ……。問題なら俺が言うまでもなく存在してるけどな。お前の頭の上に」
奏夜が悠二の頭上を指差す。

「む。なによ、もんくあるわけ？」
コップほどの大きさになったシャナ――もとい、しゃなたんが、メロンパンをかじりながら奏夜を睨む。
「坂井よ、こいつこそ世界観破壊の権化だと思わんかね」
「……世の中には知らない方がいい謎もあると、天の道を行く男も言ってたじゃないですか」
「ああ。スーパーヒーロータイムの終わりで大剣人ズ〇ーンに言ってたな。懐かしい」

いやにメタ発言の飛び交う会議である。

「ゆうじ、メロンパン！」
「えぇ？　その身体の何処にそれだけの物量が……」
「うるちゃいうるちゃいうるちゃい！」
「わっ、ちょっとシャナ！　髪の毛抜かないでよ！」

何処かほのぼのとした喧嘩が続く。

「やれやれ……。最初からこんなテンションで大丈夫なのか？」
「あん？　何悠長なこと言ってんだ。前振りなんかまだるっこしいだけじゃねぇか。盛り上がって行こうぜ盛り上がって！」
「その通りだぜ奏夜！」
キバットがようやく復活し、モモタロスのハイテンションに乗っかる。

「今回はお祭りなんだからよ、キバッて行こうぜ！」
「……ふむ、それもそうだな」
思い直したのか、奏夜も笑って頷く。

「んじゃ、ここで一つ注意事項だ。
今回は尺の都合上、出演は電王チーム。そしてキバ＆シャナチームからは、基本的に俺、平井、坂井、キバットだけになる。
作者の文才の無さが招いた結果だが、目を瞑ってやってくれると嬉しい。
それから、このストーリーは『仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ・ＢＬＯＯＤ』の時系列的にはやや後の話になる」

「ぐ、具体的には、僕とシャナが『奏夜先生がキバ』だってことを知っている設定です。い、痛い、髪が痛い！」

「つまんねぇ前置きはこれだけだ！
後は楽しく見てくれよな！
じゃあいよいよスタートだ！
俺の映画は、最初から最後まで――」

「キバッて、行くぜ！」

「えいがのわたしたちもみなちゃい！」

001

御崎市のとある港。
黒い車が、荒い運転のまま突っ込んでくる。その車の運転手二人は、何を隠そう銀行強盗。
後ろからは、パトカーが追い掛けて来ているが、距離が離れ過ぎている。
撒かれるのは時間の問題のように思われた。

「うわっ！？」
警察官の一人が悲鳴を上げた。
パトカーの群れを掻き分け、青と白のカラーリングが成されたバイクが現れたのだ。
「行くぜ行くぜ行くぜぇーー！」
バイクは黒い車をウィリーで飛び越え、進行方向に先回り。
乗り手は右手に構えたショットガンを、容赦なく車に撃つ。
弾丸はホイールに命中し、車はバランスを崩して横転する。

「フン！！」
乗り手がヘルメットのフード部分を上げる。ワイルドな風貌に、赤い瞳の青年だった。
髪に一本、トレードマークの赤いメッシュが入っている。
と、そこへもう一台。黒いバンが到着し、中から四人の人影が降りてきた。
髪を一纏めにした小さな女の子。
青の亀、黄色の熊、紫の竜をモチーフにしたような、謎の生き物三人組だった。
「お、おい！　ありゃ、何なんだよ！？」

青年を含めた5人組を指しながら、追い付いた警察官の一人が叫ぶ。
先輩の警察官が、それに答えた。
「デンライナー署だ」
「デンライナー署？」
首を傾げる警察官達の頭上を、時の裂け目から現れた赤色の電車が掠める。

――時の警察列車デンライナー。
時を越える犯罪者、イマジンが起こす難事件を、徹底的にクライマックスで解決する刑事達。
彼らには警察手帳も捜査令状もいらない。
彼ら自身が手帳であり、令状である。
彼らに逮捕出来ないものは唯一つ。
神のみ！
それが、チーム・デンライナー！

ナレーションをバックに5人組は一列に並び、何処かのヒーローよろしくポーズを決める。

『俺達、参上！！』

◆◆◆

その日、奏夜、シャナ、悠二の三人は、市内某所にある公園にて、

何故か土を掘っていた。
無論、童心に帰ったとかいうファンシーなものではなく、ちゃんとした理由がある。
「本当にこの辺に埋めたんですか？」
「ん～、多分」
「多分じゃないわよ多分じゃ。これで見つからなかったらどうするつもりなの？」
「文句言う前に手を動かせ。報酬のメロンパンが欲しければな」
「うっ……」
弱い。食べ物が絡むとシャナは弱い。
そのことを奏夜はよく理解していた。

――ガン！
「あっ！　先生、これじゃないですか？」
スコップが何かにぶつかったのを感じ、悠二は地面を更に掘り起こす。
中から出てきたのは、赤い蓋の瓶。
発酵させていたバイオリンのニスだ。
「ああ、それだそれだ！　いやー、良かった良かった。野良犬や野良猫に掘り起こされてらどうしようかと思った」
「こんなピンポイントな場所を掘り起こす動物なんていないわよ」
シャナが冷静な顔で、手についた泥を払った。

「終わったなら、早く帰るわよ。
奏夜、ちゃんと約束は守ってよね」
「わかってるよ。坂井も悪かったな、付き合わせちまって」
「いえ、いつもお世話になってますから。このくらいは」

そうして奏夜が、ポケットにニスをしまいかけた時だった。

――バシュッ！

奏夜が突然立ち止まる。
「……先生？」
「奏夜？」
シャナが奏夜の肩に手をかける。
だが、

――バシッ！
奏夜がその手を払い除けたのだ。
「っ！　な、なにす……」
るのよ。と続けるつもりだったのだろう。
しかしそれより早く振り向いた奏夜を見て、シャナと悠二は硬直した。

「降臨！　満を持して」
奏夜の口から飛び出したのは、いつもの不遜な言葉。
しかし、口調は明らかに違うものだった。
服装も、今の一瞬でどうやったのか、白いショールを肩にかけ、髪には白いメッシュが入っている。

「せ、先生？　どうしたんですか？」
「……」

唖然とする二人を捨て置き、奏夜――否、W奏夜は自分の身体を見る。
「ふむ、良太郎程では無いが、中々に使い勝手のいい身体だな。どれ、少々この身体借りていくぞ。ありがたく思うがいい」
そう言いながら、W奏夜は歩き去っていく。
「シャ、シャナ……あれってまさか、“徒”の仕業か何か？」
「わからない。けど、もしそうなら放ってはおけないわ」
「うむ。目的が分からぬ以上、追い掛けた方がよかろう」
アラストールの言葉を受け、二人は奏夜の後を追う。

それが、これから巻き起こる大事件の始まりだとも知らずに。

劇場版仮面ライダーキバ／ＢＬＡＺＩＮＧ．ＢＬＯＯＤ
『超・クライマックス刑事』

００１（後書き）

そんなこんなで、仮面ライダーキバ・クライマックス刑事編スタート！

しかし序盤からハッちゃけてますね（笑）

作者はイマジンの中ではデネブが好きなんですが、憑依されるなら絶対ジークです。あの唯我独尊感がいいんです。勿論、モモ達も大好きですけどね。

さてさて、３人&電王チームを待ち受ける事件とは？

次回をお楽しみに！

002

◆◆◆

場所は変わって、時の警察列車デンライナー署内。
「は～い、コーヒーですよぉ～」
間延びした声で、デンライナーのウェイトレス、ナオミがデンライナー署内の面々を労う。

「おお！　待ってたぜ！」
「ありがと、ナオミちゃん」
「いただくでぇ！」
「わ～い、コーヒーだコーヒーだぁ～♪」
それを受け取るのは、明らかに人間ではない四人組。
赤い鬼のようなモモタロス。
青い亀のようなウラタロス
黄色い熊のようなキンタロス。
紫の竜のようなリュウタロス。
皆、未来からやってきた侵略者『イマジン』……なのだが、彼らはそういった破壊活動はしない。

「えっと……報告は以上です。オーナー」「ごぉ～苦労様でした良太郎くん。あと、私は今、刑事長（デカ）です。お忘れのないように」
「あ、すみませんオー……」
「刑事長」
「……刑事長」
刑事長と呼ばれた中年の男性への報告を済ませた青年は、一礼して指令席を離れる。

――この気弱そうな青年こそ、野上良太郎。
モモタロス達イマジンと心を通わせ、共に時の運航を守る守護者。
『仮面ライダー電王』である。

「それで、刑事長。今回の事件、何かわかったことはありましたか？」
デンライナーの乗客の一人、ハナが聞く。
「はい、ターミナルの駅長から連絡がありました。
ひじょ～にマズいことが起きているようです」

彼らは現在、チームデンライナーとして、あるイマジンの起こした事件を追っていた。
オーナー……もとい、刑事長の元から盗まれた、電王の変身ツールにして、時の旅の通行証でもある『ライダーパス』。
そのスペアが、イマジンに盗まれたのだ。

……もし万が一、パスが悪用されるようなことになれば、時間を好きなようにねじ曲げることさえ可能。
だからこそ良太郎たちは、この事件の解決のため急遽、デンライナー署を立ち上げ、捜査を開始したのである。
――もっとも、モモタロス達イマジンの面々は、半ばノリで捜査さているフシがあるのだが。

「そのイマジンの実態はまだわかりません。
んが！
情報によると、そのイマジンは、ファンガイアの一派と手を組んだようです」
「ファンガイア……？」
「でも、ファンガイアって最近は息を潜めているって聞きましたけ

ど」
「ええ。しかぁ～し、ファンガイアの中にも未だ、反乱分子というものがあるそうでしてねぇ～。
彼らと一時的な同盟を結んだようです」
「へっ！　ファンヒーターだかなんだか知らねぇが、何が来ようが俺がぶっ飛ばしてやるぜ！」
血気盛んなモモタロスが、覇気優々と拳を打ち鳴らす。
「アホ、ファンヒーターやない。ファンガイアや」
義理に厚いキンタロスがきっちりと間違いを正した。
「あ……そうなの？」
「キンちゃん無駄だって。訂正して直るなら、とっくに直ってるよ。先輩の記憶力の無さは」
「あはは～♪　モモタロスのバーカバーカ♪」
「なんだとカメ、ハナタレ小僧ぉ！」

ウラタロスとリュウタロスに掴みかかっていくモモタロス。
良太郎が「ちょっと三人とも、止めなよ～！」と仲裁に入るが、これもいつも通りなため、ハナは何処吹く風で刑事長に言う。

「じゃあ、私たちは捜査に戻ります」
「ああ、待ってくださいハナくん。一つ、情報があります」
「情報？」
そう言いながら、刑事長はポケットからハンカチを取り出し、広げる。
『ん？』
刑事長以外の面々が、ハンカチに注目した。
「はいっ！」
刑事長がハンカチを上げるとあら吃驚。
捜査資料の束が。
『おぉ～！』

拍手が巻き起こる中、刑事長は捜査資料に挟まっていた写真を手に取り、ハナに手渡す。
そこには、茶髪に背広を着た二十代前半の男性が写っていた。
「刑事長。この人は？」
「名前は紅奏夜。
ファンガイアに、深く関わる人物です。
もしかしたら、今回の事件について何か知ってる、かも？」
含みをもたせた笑みを浮かべた刑事長から、良太郎はハナの持つ写真に目を落とす。

「紅、奏夜……」
会合は、近付いていた。

◆◆◆

一方、御崎市街地。

「おい幸太郎。こっからは遊びじゃないんだからな。気ぃ抜くなよ」
「わかってるって。もう何度目だよ、桜井さん」
「ゴメンな幸太郎。侑斗も本当は、幸太郎を心配してるんだ。だから大目に……」
「デ～ネ～ブゥ～！」
通りを歩く四人組。
その内の一人、桜井侑斗が、隣を歩く黒衣のイマジン――デネブに見事な関節技を決める。
「余計なこと言うんじゃねぇ！」
「侑斗！　わ、わかったから！　参った、参った！」

「……説得力が無いな」
「まぁ、いいんじゃないか？　じいちゃんも、桜井さんとデネブはいつもこんな感じって言ってたし」
もう一人の青年、野上幸太郎と青い鬼のようなイマジン、テディが、二人のやり取りに軽く呆れ返る。

「痛たたた……」
「ったく、お前は何時になったら――っと、ここだな」
四人が見上げるのは、御崎市には珍しい、筍よろしく聳え立つ高層ビル。

「よし。準備はいいな？　幸太郎」
「はい！」
「虎穴に入らずんば虎児を得ず、か」
「潜入捜査か……。誰かを騙すのは嫌だなぁ」

それぞれの心境を語り、奇妙な四人組は建物内へと消えていった。

００２（後書き）

幸太郎と侑斗の絡み難しいっ！！　原作では何の会話も無かったし、ユウの時の対応は参考にならないし……。
当たり障りの無さそうな『桜井さん』で呼ばれ方は統一してみたんですがどうでしょう？

今回は短くてすみません；　次回はようやくキバチームと顔合わせです。

003

デンライナーから降りた良太郎とハナは、一路、今回の事件の鍵を握るらしい『紅奏夜』なる人物を訪ねてみることにした。

「じゃあ、ハナさん。取り敢えず、この奏夜さんって人のこと探してみようよ」

「そうね。オーナー……じゃなかった。刑事長から貰った資料によると、この辺りに住んでるみたいだし」

頷き合って、良太郎とハナは歩き出す。

デンライナーから降りて出た先は、市内某所の公園。

比較的面積のある公園だが、平日ということもあってか、見掛ける人間は少ない。

と、そこへ。

「先生、待ってください！」

「ちょっと、どうしちゃったのよ奏夜！」

ただの雑談。

良太郎とハナは聞き流しかけたが、

『奏夜？』

自分たちの探し人の名前を聞き取り、二人は声のした方へ走る。

見れば、高校生くらいの男女二人が、一人の男性を追い掛けていた。

「まったくしつこいな。私の行く道を妨げるとは、頭が高い小童達だ」

そう言う男性は白い羽毛のようなものを首に巻き、髪には白いメッシュが入っていた。

良太郎とハナは、その容姿に嫌な予感がした。

「あ、あれってもしかして……」

良太郎が皆まで言うより早く、ハナはその男の進行方向を塞いだ。

途端、男の目が変わる。

「これはこれは！　姫！　また会えるとは何たる幸せ！」

『姫ぇ？』

いきなりハナに恭しく礼をした男に対し、少年と少女が、声を裏返した。

「君、ジーク……だよね？」

「おや、良太郎も一緒か。また何か、トラブルが起きたのか？」

「アンタがトラブルの原因でしょ！　大体、何でアンタがここにいるのよ！」

「それは勿論！　姫に出会うため……」

『ふ・ざ・け・ん・な……』

男の口から、さっきまでとは違う声が飛び出す。

「ほう？　私に憑かれながらも、まだ意識があるとは……喜べ、褒め称えてやろう」

『全然褒めてるように聞こえねぇんだよ……！　さっさと出てけぇ！』

突如、男の身体から、白鳥のように白い怪人が飛び出した。

それに合わせ、男の髪のメッシュが消え、羽毛も無くなった。

「先生！　大丈夫ですか！？　僕達のことわかりますか！？」

「ハァッ、ハァッ……ああ、何とかな」

「何なの、この白いやつ」

シャナが奏夜の中から出てきたイマジン、ジークを見る。
「おい、手羽先野郎！　今すぐフライドチキンにしてやるから覚悟しろよコラァ！」
身体を使われたことがそんなに嫌だったのか、奏夜がジークに食って掛かる。
「ま、ま、待ってください！」
慌てて良太郎が奏夜を止める。
「退け、見知らぬ青年！　俺は今猛烈に機嫌が悪いんだ！」
「いいから話を聞いて、紅奏夜さん！」
「……？」

ハナの言葉に、奏夜の拳がひとまず止まる。
「キミ、なんで俺の名前を？」
「私たちは、あなたに用があってきたの。
捜査に協力して貰いたくて」
「捜査？」
「あ、僕ら、一応こういうものです」

良太郎がライダーパスに入った警察手帳を見せる。
「……あの、見たことないデザインですけど。本当にそれ手帳なんですか？」
悠二が妥当なツッコミを入れた。
「私たちは、普通の警察じゃないんです。
こいつらみたいな、イマジンを追い掛けているんです」
ハナはジークを指差した。
『イマジン？』
奏夜、シャナ、悠二の声が重なる。

「えっと、ファンガイアとか、“徒”じゃなく？」

『トモガラ？』
今度は良太郎とハナが首を傾げる。
「あー、少し情報整理させてくれるか？
まずお前らは、俺に何を頼みに来たんだ？」
「おい貴様、姫に何と言う無礼な振る舞いを！」
空気を読まないジーク。ハナの額に青筋が浮かんだ。

「もう、話が逸れるからデンライナーにでも行ってなさい！」
「ぐおうっ！？」
ハナの右ストレートが決まり、ジークは光の玉になって飛んでいった。

ふん、と鼻を鳴らして、ハナは続ける。
「今私たちが追ってる事件に、ファンガイアが絡んでるみたいなんです。ある情報で、あなたが詳しいって聞いたの」
「ファンガイアのことまで……、お前達、一体何なの？」

シャナが喧嘩腰に、良太郎たちに詰め寄る。
「え？　あ、あの……」
「はっきりしなさい！」
「ちょっとシャナ、そんな聞き方ないだろ」
「そうだぞ。さっきのヤツじゃないが、お前も大概話を逸らして……」
奏夜と悠二がシャナをたしなめる。

――バシュッ！

怯える良太郎に、またあの光の玉が入り込む。

「かーーっ！　腹の立つガキだなオイ！」

『えっ！？』

ハナ以外の三人が目を丸くする。

しかし、今の強気な発言は、確かに良太郎から発せられたものだ。

彼は今、髪型がオールバックに変わり、赤いメッシュが入っていた。

「ちょ、ちょっとモモ！！　勝手に出てくるなって言ったでしょ！？」

「うるせぇよハナクソ女！　おいちびっこ、俺達はこの男に聞いてんだ！　関係ない奴はすっこんでろ！」

「なっ！」

M良太郎の言動にムカついたシャナの行動はストレートだった。

M良太郎の足目掛け、強烈な蹴りを食らわせる。

「のわぁーー！　痛ッてぇ～！！」

痛む足を抱えるM良太郎。

「な、何がどうなって……」

悠二が呟きかけ、

――バシュッ！

また違う光の玉が、今度は悠二に入り込む。

「まったく、何なのよこいつら……ひゃわっ！？」

言いかけたシャナが硬直した。

隣にいたはずの悠二が、いきなりシャナの肩に手を回して来たのである。

「ほら、先輩。だから言ったじゃない。先輩じゃ揉めるだけだよってさ」

そう言う悠二は、いつの間にか黒縁眼鏡をかけ、青いメッシュが髪

に入っていた。
「お、おい坂井？」
「ゆ、悠二？」
シャナは驚きと羞恥を入り混ぜながら、何処か甘い雰囲気を漂わせる悠二――U悠二を見る。

「いやぁ、ごめんね。あの赤い人、四文字以上の単語もロクに覚えられないような頭脳だから」
言いながら、U悠二は更にシャナとの密着度を上げる。
「――――っ！」
比例して、シャナの心臓の鼓動も、張り裂けそうなレベルにまで達しようとしていた。
「そんなに難しい話じゃないんだよ。捜査のための型通りの質問なんだ。僕に、少しだけ時間くれないかな？　ね、お姫様」

あろうことか、とうとうU悠二はシャナの手の甲に口付けた。
「う、あ、あ」
シャナは顔を耳まで真っ赤にし、好意を抱く少年の思いも寄らぬ行動に、魚の如く口をパクパクさせる。

「おいスケベ亀！　何やってやがんだてめえ！」
痛みから復活したM良太郎が、U悠二に掴みかかる。
「何って、釣り以外に何かあるの？　先輩」
「てめえはもう少し空気読みやがれ！　んなことやってる場合か！」
「うわ、先輩に言われたくないなー。空気読めないとか」
「ああ？　もういっぺん言ってみろ！　喧嘩なら買うぞコノヤロー！」
「後悔するのは先輩だと思うけど？」
「上等だ、今日という今日はてめえを亀鍋にしてやる！」

「止めなさい！」
本気で殴り合いに発展しかけたため、ハナがストップの右ストレートをかける。
「のあっ！」
「いたっ！」
M良太郎とU悠二は、二人仲良くダウン。

「ね、ねぇ。悠二、どうしちゃったの？」
シャナが珍しく狼狽えた様子で、ハナに問い詰める。
「イマジンに憑依されたの。さっきの奏夜さん見たでしょ？」
「あの手羽先野郎みたいなのが、今の坂井には取り憑いてるってことか？」
「そう。イマジンに憑依されると、精神を乗っ取られちゃうの。ファンガイアの奏夜さんみたいに、特別な力を持ってるか……」

『二人とも止めてよっ！』
『早く出てって下さい！』
ハナが言い切るよりも早く、M良太郎の中から、モモタロスが飛び出し、U悠二の中から、ウラタロスが飛び出した。

「あれ？　キミ、何で僕を追い出せたの？」
ウラタロスが不思議そうに聞く。
「はぁっ、はぁっ……な、何でって、普通に追い出せましたけど……？」
「悠二。大丈夫？」
「うん、ごめんシャナ。さ、さっきは、その……」
「――っ！　う、うるさいうるさい！」
「あだっ！」
さっきのキスを思い出したのか、顔を赤くしてシャナは悠二をひっ

ぱたく。

「意識まであるなんて……もしかしてキミ、特異点なの？」
「なに？　マジかよ良太郎！」
「特異点？」
驚く良太郎とモモタロスに、奏夜が聞きなれない単語を拾う。
代わりに、ハナが説明を加えた。

「特異点っていうのは、簡単に言えば時間の影響を受けない人のことよ。
イマジンに憑依されても自我が保てるし、ある程度イマジンの支配に抵抗も出来るの」
「僕とハナさんはその特異点なんです。
でも、そんなに何人もいるわけじゃないんですけど……」
「……時間の影響を、受けない？」
奏夜がその部分だけを復唱する。

「平井」
「うん。多分、“零時迷子”のせいだと思う」
「僕を踏みつけたまま話を進めな痛たたた！」
「うるさいうるさいうるさいうるさい」
「――取り敢えず、積もる話もあるだろ。少し場所変えようか」
ぎりぎりと悠二を足で踏みつけるシャナに苦笑いして、良太郎達に提案する。

しかし、
「待て良太郎！　　イマジンの匂いだ！」
「えっ！？」
モモタロスがストップをかける。
すると向こうから、フラフラと一人の老人が歩いてきた。

その老人の体から砂が溢れ、アラビア盗賊のような姿、バンデットイマジンの姿を形取っていく。

「ヴァァァ……」

「あ～らら、こんなとこにまではぐれイマジンが来ちゃったね」

「おいおい、まさか俺達も巻き込まれてる感じ？」

「って、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

シニカルにそう言う奏夜に怒鳴り、シャナの髪が紅蓮に染まりかける。

だがそのシャナを、良太郎が手で制す。

「下がってて、僕がなんとかするから」

「なっ、お前、何を言ってるかわかってるの！？」

シャナの意見ももっともだ。

憑依された状態はさておき、さっきまでの良太郎は年下に見えるシャナにすら、気圧されているような気弱さな性格だ。

とても役に立つようには見えない。

止めようとするシャナを振り切り、良太郎は叫ぶ。

「モモタロス、行くよ！」

「おう！！　まかせとけ！！」

良太郎は何処からともなく取り出した銀色のベルト『デンオウベルト』を腰に巻き付け、ベルトについた４つのボタンのうち、赤いボタンを押した。

汽笛のような待機音が流れ、良太郎は手に持ったライダーパスを構える。

「変身！」

ベルト中央部にあるターミナルバックルに、ライダーパスをセタッチ。

【ＳＷＯＲＤ・ＦＯＲＭ】

電子音と共に、良太郎の体が光に包まれ、素体形態の『プラットフォーム』に変化。

さらにそこから、飛来した赤いオーラアーマーが装着。
身体を走るデンレールを伝い、頭部に桃型の電仮面がジョイント。
電仮面がリ・バースすれば、変身完了。

『仮面ライダー電王・ソードフォーム』。
良太郎にモモタロスが憑依することで生まれる、時の守護者だ。

「俺、参上！」

モモタロスの声で、電王はお決まりの台詞とポーズをきめる。

「久しぶりだからなぁ、準備運動も兼ねて暴れるか！」
その変身に驚く奏夜、シャナ、悠二を置き去りに、電王は腰に備えられた武器『デンガッシャー』を慣れた手付きで連結させる。
あっという間に、デンガッシャーはソードモードに移行し、真紅の刀身が現れた。

「行くぜ行くぜ行くぜぇ～～！」

デンガッシャーを担ぎ、荒々しい勢いのまま、電王はバンデッドイマジンに向かっていった。

００３（後書き）

センター英語の問題方式変更にむしゃくしゃして投稿。だが後悔はしていない。

・『悠二の最初の憑依キャラはウラタロス以外ありえねぇ！』みたいな思考がある僕は重症ですｗｗ

・バンデットイマジンは、感想欄にてある読者の方が投稿して下さったイマジンです。次回活躍予定（＾Ｏ＾）

次回はバトルですが……最初に言っておく！

奏夜がキバになるのはかーなーり後だ！！（おい

すみません（＜＿＞）

ただ、ラストバトルは色々とすごいことになるのでお楽しみに！

004

「行くぜ行くぜ行くぜぇ～！」
気合いたっぷりにデンガッシャーを振る電王ＳＦ。
ザンッ！　という小気味のいい音と共に、バンデッドイマジンから火花が上がる。

「グッ！」
怯みつつ、バンデッドイマジンは手に持ったカトラスの剣で電王を迎え撃つ。
しかし、踏んできた場数が違う。

「てぇりゃあっ！」
バンデッドイマジンの攻撃を軽くいなし、電王ＳＦはカウンターの斬撃を加える。
「へっ、やっぱ主役はオレだな！」
誇らしげにデンガッシャーを再び肩に担ぎ、電王ＳＦは余裕綽々といったところだ。

そんなペースに着いていけないのは、バンデッドイマジンのみならず、奏夜達も同じだった。
「あいつ、何なの？　何の力もない人間なのに、今後はあんな姿になるなんて」
「あれは『電王』。時の運行を守る戦士なの」
「電王？」
悠二が問うと、ウラタロスが答えた。
「そっ、電王。特異点しかなれない、選ばれた戦士ってワケさ。
良太郎も先輩も経験を積んでるし、あれくらいのイマジンなら負けないよ」

「ふーん……、世界は広いな」
奏夜は本気で感心しているらしかった。
そうこう言っている間にも、電王ＳＦの攻撃は続く。
遂にバンデッドイマジンは、疲労からフラフラと身体を揺らし始めた。

「よっしゃあ！　一気に決めるぜ……ってうぉっ！？」
『わぁっ！？』
楽勝ムードだった電王ＳＦを、高速の影が弾き飛ばす。

「グルルル……」
唸り声を挙げるのは、白い羽毛に包まれたような姿に、湾曲した角を持つの異形、ゴートファンガイア。
「なんだありゃあ！？」
「ファンガイアか！」
「私が行く！　奏夜は悠二達をお願い！」
奏夜が言い終わるよりも早く、シャナが飛び出していく。

髪と瞳が一瞬で紅蓮色に染まり、黒衣『夜傘』から大太刀『贄殿遮那』を抜く。
「封絶！」
シャナが指で天を指すと、赤いドーム状のサークルが辺りを包む。

「んだコリャ！？　ちびっこ、てめえの仕業か！」
「わたしは、ちびっこじゃ、ないっ！！」
電王ＳＦの言い草に憤慨しつつも、シャナはゴートファンガイアに大太刀を走らせる。

「グッ！！」

ゴートファンガイアがよろけ、紅蓮の炎が散った。
「シャナ、気を抜くな。ファンガイアの能力は多彩だ。手の内がありだけとは思えぬ」
「うん、わかってる」
アラストールの言葉に同意し、シャナは鋭い瞳を向け続ける。

次に驚いたのはハナ達だ。
「あの子、一体……それにこの赤いドームは？」
“封絶”ってヤツだよ、お嬢ちゃん。
因果孤立空間――要するに、誰も干渉出来ない結界を作ったんだ。
ほら見てみろよ」
奏夜が指差すと、木々から落ちる木の葉が空中で止まっていた。
「でも、僕達は動けるみたいだけど？」
「さぁな。ただ、時間さえも切り離す封絶だ。特異点は時間の影響を受けないんだろ？
ならアンタらや、あのデンオウってヤツが動けても不思議じゃない」

奏夜は冷静に言い放つ中、戦闘は続く。
「しつけぇんだよ、このっ！！」
電王ＳＦがまたバンデッドイマジンにデンガッシャーの剣閃を走らせる。

しかし突如、バンデッドイマジンの身体が二つに別れた。
「なにぃ！？」
なんと、一体のバンデッドイマジンが、二人に増えていた。
「ふっ、双子！？」
電王ＳＦはバンデッドイマジンを指差しながら言う。
次の瞬間、またバンデッドイマジンは三体に分裂。
「三つ子かぁ！？」

そう言う間にも、バンデッドイマジンはどんどん増え、最終的には４０体は軽く越す数になった。
『こんなにぃ〜〜！？』
「ひぃ、ふぅ、みぃ……ええい、くそっ！！　面倒くせぇ！」
電王ＳＦはヤケクソ気味に、バンデッドイマジンにデンガッシャーを振り回す。

「っはぁ！！」
片や、ゴートファンガイアに、シャナが斬撃を飛ばす。
「グ、ガァァッ！！」

ゴートファンガイアは雄叫びを上げ、いきなり姿を消した。

「！　何処に……うぁっ！」
シャナの身体がいきなり宙を舞った。
「シャナ！」
悠二が思わず叫ぶ。
ゴートファンガイアの能力は、超加速。
目にも止まらぬスピードで、相手を蹴散らす戦法を取るファンガイアだ。
その突進は、岩盤さえも容易く砕く。

「くっ！」
シャナはゴートファンガイアを目で追おうとするも、あまりの加速に、彼女でも影を捉えるのがやっとだ。
撹乱され、また一撃を喰らう。

『モモタロス！　あの子を助けなきゃ！』
「そうしてぇのは山々なんだがよ、こっちも忙しいんだよ！」

電王ＳＦは電王ＳＦで、分身したバンデッドイマジンの相手で手一杯だ。統率制が無いとはいえ、ここまでの人数差はツラい。

「まずいな……。ありゃ平井には相性が悪い」
奏夜が助けに行こうとする。
しかしそれを、ウラタロスが制した。
「キミ、ちょっと待ってくれないかな？」
「何だよ、下らない雑談なら聞かねぇぞ」
そう抗議する奏夜から目を外し、ウラタロスは悠二に聞く。
「ねぇ、キミ随分とあのシャナちゃんって子が心配みたいだけど、彼女を助けたいかい？」
「えっ？」
予想外の質問に、悠二は戸惑う。
「ど、どういうこと？」
「悪いけど、説明してる暇は無いんだ。助けたいか、助けたくないか、二つに一つ」
質問の意図は分からない。
けれど、質問の答えは直ぐに出た。

「――助けたいよ。助けたくないわけない！」
「いい答えだ」
ウラタロスは頷く。
「ハナさん、オーナーから予備のパス、一つ預かってたよね？貸してくれないかな」
「え？　　う、うん。あるけど……」

ハナからライダーパスを受け取ると、ウラタロスは悠二に向き直る。
「ちょっと身体借りるよ」
「えっ？　　うわぁ！？」
ウラタロスはまた光の球となり、悠二の中に入り込んだ。

◆◆◆

「くっ、早い！」
「むぅ、自在法を使っていないだけ厄介だな」
高速移動を続けるゴートファンガイアに手を焼くシャナ。
対応策らしい対応策も思い付かぬまま、敵の攻撃だけが続いていた。

そしてまた、高速の影がシャナに体当たりをかけてくる。
「っ！」
無駄だと解りながらも、大太刀を構える。
――しかし、衝撃はいくら待っても来なかった。
シャナは、突然視界の前に現れ、ゴートファンガイアの攻撃を受け止めた人物を見て唖然とする。

「女の子に手を挙げるなんて、好きじゃないなぁ、そういうの」
「悠二！？」
割り込んだのは、ウラタロスの憑依するU悠二だった。

U悠二はゴートファンガイアを蹴っ飛ばし、腰に良太郎の使うものと同じ、デンオウベルトを巻き付ける。
「うん、やっぱりベルトも出せるね」
言いながら、U悠二はベルトサイドにある青いボタンを押す。
待機音が流れ、慣れた様子でパスを構える。

「変身！」

【ＲＯＤ．ＦＯＲＭ】

良太郎と同じように、素体形態のプラットフォームから、青いオーラアーマーが装着される。
頭部には亀を模した電仮面がリ・バースし、変身完了。

『仮面ライダー電王・ロッドフォーム』

冷静な判断力とトリッキーな技で相手を翻弄することを得意とする、ウラタロス憑依時の電王だ。

「お前、僕に釣られてみる？」

台詞をキメて、電王ＲＦはデンガッシャーを組み換え、長い槍のような形態のロッドモードにチェンジ。

「っせい！」
ヒュンッ、という風切り音を響かせ、電王ＲＦはゴートファンガイアを薙ぎ払う。
「ゆ、悠二？」
「おいおい、何でもありか？　今回は」
「嘘でしょ！？」
もはや吃驚の領域を飛び越えた。
『こ、これって、あの良太郎って人と同じ……？』
「亀！？　なんでお前電王になってんだよ！？」
「いやぁ、僕も半分駄目元だったんだけど……、ま、ちゃんと変身出来たし、結果オーライでしょ」デンガッシャーを担ぎ、シャナを見る。
「シャナちゃんだっけ？　　僕と組めば戦いやすいと思うんだけど、どうかな？」
「……っ、悠二の身体、ちゃんと返しなさいよね！」
「勿論♪」

不承不承といった様子なシャナに対し、電王ＲＦは軽い調子で頷く。

◆◆◆

「グッ、オォッ！」
ゴートファンガイアは直ぐ様復活し、また高速移動の世界へと消える。

「さて、行きますか。せいやっ！」
電王ＲＦはデンガッシャー・ロッドモードを構え、広範囲が射程に入るよう調節し、スイングする。

先端から青い糸状のスパーク、デンリールが伸び、周囲を薙ぎ払う。

「ギャッ！」
この場合なら、高速移動していても関係ない。
射程範囲内にいたゴートファンガイアは、高速移動を解除され、電王ＲＦとシャナの眼前に現れる。

「さっさとキメるよ。先輩！」
「けっ！　仕切ってんじゃねぇよ！」
バンデッドイマジンを追い詰める電王ＳＦが答え、二人の電王はライダーパスを取り出し、

「おい平井、見せ場持ってかれるぞー」
「わかってるわよ！」
シャナが少し拗ねた口調で言うと、大太刀『贄殿遮那』が煌々と燃え上がる炎を纏う。
二人の電王は、ライダーパスをベルトのターミナルバックルにセタ

ッチした。

【ＦＵＬＬ．ＣＨＡＲＧＥ】

【ＦＵＬＬ．ＣＨＡＲＧＥ】

「行くぜ！　必殺・『俺の必殺技』……」

「そろそろ三枚に下ろすか」

電王ＳＦがデンガッシャーを掲げると、赤い刀身部分が分離し、空中の刀身とフリーエネルギーの光によって柄と接続される。

「パート２！」

電王ＳＦがデンガッシャーの柄を振り抜くと、赤い刀身が回転しながら、バンデッドイマジンを左、右と二回に渡って薙ぎ払う。

４０体いようがいまいが、この派手な攻撃範囲ならば関係ない。次々とバンデッドイマジンの数は減っていく。

「うぉりゃあっ！」

トドメの縦斬りをきめ、バンデッドイマジンに電王ＳＦの必殺技『エクストリームスラッシュ』が炸裂。

「グァァァー―ッ！」

威力に耐えきれず、バンデッドイマジンは爆散した。

「へっ、決まったぜ！」

電王ＳＦが勝利の余韻に浸る中、シャナたちの側も決着がつこうとしていた。

「そらっ！」

電王ＲＦはデンガッシャー・ロッドモードをゴートファンガイアに向けて投擲。

デンガッシャーはフリーエネルギー製の網、オーラキャストに変化。ゴートファンガイアを絡めとり、動きを封じる。

『はぁーーッ！！』

電王ＲＦの必殺技『ソリッドアタック』のデンライダーキックが、シャナの振り抜いた炎剣が、ゴートファンガイアにクリーンヒット。

スパークと炎に包まれながら、ゴートファンガイアはガラス片となって砕け散った。

◆◆◆

「悠二、大丈夫？」

「うん。ちょっと、ふらふらするけどね」

心配そうに聞いてくるシャナに、電王の変身を解除した悠二は苦笑いを返す。

「どーやら、色々と聞かせてもらわなきゃならないらしいな」

「はい。僕らのことも、全部お話します。だから奏夜さんも、協力して欲しいんです」

「ああ、いいだろう。ただ……」

良太郎の頼みに頷いて、奏夜はシャナと悠二を見る。

「こいつらも一緒にいいか？　　さっきの戦いで、この二人もただの人間じゃないことは、わかってるだろ？」

「ええ、構いません。じゃあ着いてきて。私たちの警察署に案内するから」

ハナに先導されながら、奏夜は独りごちた。

「面倒くさくなってきやがったな……」

００４（後書き）

どうも、今回も色々と世界観を破壊した一条ツカサです（笑）

・まさか本編じゃなく、こちらで悠二が変身することになるとは……世の中、本当に何が起こるかわからない（お前が原因だろ）。

・悠二が変身出来る理由&ゴートファンガイアについては、感想欄に寄せられたアイデアを参考にさせて戴きました。

・シャナが弱く感じるかも知れませんが「加速能力ばかりはどうしようもねぇよ」と割り切りました。１８巻あたりのシャナならまだ分からないんですけどね。

では、次回もお楽しみに♪

005

――デンライナー署内

「亀！　さっきの続きだ、じっくりと決着つけようじゃねぇか！」
「あーあ、しつこいなぁ～、先輩は。キンちゃんちょっと手伝っ…
…て、寝ちゃってるし」
「ゴガ～～ッ」
「わ～い、ケンカだケンカだ～♪」
「ふう、相変わらず騒がしい場所だ」

「……警察署、ですよね？」
「あ、あはは。ゴメンね。いつもこんな感じなんだ」
騒がしいイマジン達の側のソファーには、奏夜、シャナ、悠二が腰掛け、それに向かい合う形で、良太郎とハナが座っていた。

「俺達の話は、これで全部だ」
「わたし達も同じです」
奏夜とハナを中心に、互いの立場を整理した。
フレイムヘイズ、“紅世”、イマジン、時の運行。
自分たちが知ること全てを、両陣既に認知している。

「時を越える列車『デンライナー』か……」
「こんなので、本当に時を越えられるの？」
「我も聞いたことの無い話だな」
悠二、シャナはともかくとして、アラストールも半信半疑といった印象である。
「もぉ～ちろん。時の狭間を走る列車、それがこの『デンライナー』

です」
ドアが開き、杖をくるくる回しながら、刑事長が入ってきた。
「誰だ？　あれ」
「あ。デンライナーのオーナー……じゃなかった、デンライナー署の刑事長です」
「はじめまして。紅奏夜くん、シャナくん、坂井悠二くん、そして“天壌の劫火”アラストール殿」
「我を知っているのか？」
「はい。先代の『炎髪灼眼の討ち手』の時代から、お噂はかねがね」
「刑事長、“紅世”のことも、知ってたんですか？」
「えぇ。しかし、まさかファンガイアの方と面識があるとは思いませんでしたがねぇ。何にせよ、これはある意味ラッキーでした」
ハナの質問に軽く答え、刑事長はソファーに座る悠二に目線を向ける。
「おや？　キミはどうやら、時の影響を受けていないようですねぇ～」
悠二が目を見開く。
「……その、分かるんですか？」
「勘のようなものですがね。ただ、特異点とは違うようですが」
「あっ、そうだった！」
ウラタロスと喧嘩中だったモモタロスが、悠二に詰め寄る。
「おい小僧！　お前何で電王になれたんだ？」
更にはウラタロス、キンタロスも加わる。
「あ。それ僕も気になってたんだよね」

「せやけど、特異点なんてそうそうおらへんやろ。ホンマに電王になれるんか？」

「えっと、多分僕の中の……」
悠二が説明しようとした矢先、
「もう、亀ちゃんも熊ちゃんもまだるっこしいなぁ。入ってみればわかるじゃん♪　ほいっと！」

――バシュッ！

「うわっ！」
悪のりしたリュウタロスが、悠二の中へ。
紫のメッシュが入り、ジャケットにジーンズ、グラサンに加え、首にはヘッドホン。
ラッパーのような格好だ。
『ま、またぁ？』
「うわぁ～♪　本当に意識あるんだね！」
R悠二は楽しそうに、軽やかなステップを踏む。

「……」
シャナが無言で立ち上がる。
つかつかとR悠二の前に立ち、肩を凄い勢いで揺する。
「ゆ・う・じ・で・あ・そ・ぶ・なぁーーっ！！」
「わ、わ！　ぐ、苦しい苦しい！！」

頭がガクガク揺れ、悠二からリュウタロスが抜けた。
「シャ、シャナ！　もう戻った！　戻ったってば！」
「平井、坂井が目ぇ回してるぞ」
「えっ？　あっ！　ご、ごめん悠二！」
慌ててシャナが手を放し、悠二はゲホゲホと咳き込む。

「――笑っちゃうくらいにキャラ変わるんだな。こいつらに憑かれちまうと。
赤いの。さっき良太郎くんに憑いてたのがお前なのか？」
「赤いのだぁ？　　おい、俺にはモモタロスって名前があんだよ！」
奏夜はしばらく沈黙して、口の端をつり上げる。
「っくく、モモタロスって……。安直というか何と言うか」
「何だとコラァ！　　文句なら良太郎のセンスに言えコノヤロー！
　それとちびっこに小僧、さりげなく笑い堪えてんじゃねぇ！」
「あー、落ち着きやモモの字」

キンタロスが暴れるモモタロスを取り押さえる傍ら、シャナと悠二は口元を押さえていた。
明らかにモモタロスという名前に笑っている。

「まぁ、イマジンに関しては大体わかった。
……で、何の話だったっけ？」
「悠二くんがどうして電王になれたのかってことです」
「ああ、そうだったそうだった。
さて、何から話して、何処まで話せばいいかね。アラストール。
仮面舞踏会の連中のこともあるが」
「お前が知っていることを全て話してやればよかろう。こ奴等も他言はしまい」
アラストールの答えを聞き、一応悠二にも目配せをする。
「僕も構いませんよ」
さいですか、と奏夜は頭を掻いて口を開いた。
「こいつは――坂井悠二は、もう死んでるんだ」

「――とまぁ、そんなわけだ」

奏夜が説明し終える頃には、一気に空気が重くなっていた。
そんな中で唯一、口調を変えずにオーナーが言う。
「なぁるほど。存在の力を回復し、０時を境に同じ時間をサイクルする。
時間の流れが止まっている、それはつまり時間の影響を受けないことに他なりませんねぇ。特異点と同じく、電王に変身出来ても不思議ではありません」

「え～？　でもでも、悠二ってここにいるよ。……死んじゃったら、もうその人動かないじゃん」
「リュウタ。そういう問題じゃないんだよ」
「いいんです。それはもう、仕方ないことですから」

悠二はある意味予想通りのリアクションに、苦笑いをするしかなかった。
これぱかりは、もうどうしようもない。
むしろ、リュウタロスのような反応がありがたかったくらいである。

「ねぇ。それよりも奏夜への頼み事を先に言った方がいいんじゃない？」
シャナが少し気を効かせて、話の矛先を反らす。
「――うん。そう、だね」
良太郎もまだ衝撃から抜け出し切れていないようだったが、取り敢えずは、奏夜への依頼を簡潔に述べる。

「僕らは今、あるイマジンを追ってるんです。そのイマジンと、はぐれファンガイアが手を組んだらしくて」
「それで専門家である俺の助けが欲しかったってわけね。
……ふむ、協力する分にはいいんだが、具体的に俺は何をすればいいんだ？　そいつを倒すのを手伝えばいいのか？」

「へっ、倒すのなんか俺たちで十ぶゴッ！」

不遜な態度を取るモモタロスが、ハナの裏拳で床に沈む。

「ごめんなさい。こいついつもこうなので」

にこやかな笑顔で言うハナに、奏夜と悠二は戦慄を覚える。

ハナは何食わぬ顔で、説明を続けた。

「倒すのもそうなんですけど、私たちはあいつらからパスを取り戻したいんです」

「パス？」

「良太郎くんが持っているのと同じ、電王のパスです」

良太郎がポケットから、例の黒いパスを取り出す。

「予備が幾つかあったんですが、トレーニングしている間にまんまと盗まれてしまいましてねぇ～。もし！　パスが悪用されれば、たぁ～いへんなことになります」

「大変な、こと？」

「例えばどうなるの？」

シャナと悠二が聞くと、オーナーは意味ありげに笑う。

「過去をやり直すということは、絶大な影響力がある、ということです。

例えば悠二くん。キミが本来死ぬ時間に行き、キミが生きられるよう時間を改変したとしましょう。

どうなると思いますか？」

『……あっ』

シャナと悠二は同時に気付く。
悠二が死なない。
それは悠二の中に“零時迷子”が転移せず、シャナとも出会わないということ。
フリアグネの企みを看破することもなく、都喰らいが成立し、御崎市は消えていた。
一つの事柄を変えるだけで、ここまでの出来事が変わる。
「……何か一つでも過去が変われば」
「未来も歪められる、ってことですね」

二人の理解に、オーナーは満足そうに頷く。

「ですから我々も、デンライナー署として捜査を開始したわけです。そして、ファンガイアが絡んでいる以上、あなたにも協力をお願いしたいのですよ。紅奏夜くん」
「……にゃるほどね。そりゃ面倒なことになってるわな」
言葉の端々に、何処か楽しそうな雰囲気を含みながら、奏夜は頷く。

「いいよ。さっきも言ったが、協力する分には一向に構わねぇ。こいつは、俺達にも直結しそうな問題だしな。平井に坂井、お前達はどうする？」
「――聞く意味なんてないわ、そうでしょ？」
「元々、そのために僕らを連れてきたんでしょ」
シャナがしっかりした口調で、悠二は諦め半分に答える。

二人の意思を確認して、奏夜は良太郎に手を差し出す。
「まぁアレだ。よろしくな、良太郎くん」
「――はい！」
良太郎も嬉しそうに、手を握り返した。

――本来交わらないはずの物語は、二人の仮面ライダーを架け橋に、繋がった。

００５（後書き）

すみません、更新すっかり忘れてました；

しかも今回で話のストック切れ。どーしよう（聞くな）

・説明回。ちなみにこの話のアバウトな時系列としては、７巻終了～ヴィルヘルミナ登場の合間です。

・はっきり言って、電王チームに悠二の事情の説明はしたくありませんでした。電王に生き死にの関わったしんみりなんて似合わないでしょう（笑）

桜井さん消滅に関しては、ちゃんと救いがあるからいいとして、電王チームにリアルな死を提示するのは嫌なんです。

色々『続編しつこい』とか言われてますが、それでも電王を見ちゃうのは、電王チームの明るさあればこそですから。

次回はイマジン憑依の新たな犠牲者が出ます（笑）

お楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2917j/

劇場版・仮面ライダーキバ/BLAZING.BLOOD『超・クライマックス刑事』

2010年10月10日20時16分発行